

---

# ゆらぎこころ

星乃杏奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆらぎじいろ

### 【Zマーク】

Z4766F

### 【作者名】

星乃杏奈

### 【あらすじ】

必ずどんなに努力しても最後は彼氏の「浮気」で終わってしまう主人公。いつもの様に同僚兼男友達に自分の浮気相手として彼の前に立つてもらうと約束した。しかし、自分の頼みごとが原因で運命は180度変わってしまう。

少しの懸ごとでわな心（繪書も）

楽しんで頂けたらなによつです

## 少しの思いと小さな心

「よし決ました」

私は化粧室の鏡を前にして、携帯を思いつきり閉じた  
鏡に映るのはいつも代り映えのしない自分が、これから気が重い  
事を行わなくてはいけなくなつてしまつたのだ

ここは町の中心部にあるオフィス街のど真ん中

私は大学時代の友達と会社を立ち上げて今に至つていたりする  
昔は数人だつた仲間達も年々増え、それと比例する様に売り上げも  
結構上がつている

今日私のテンションが一気に下がつた問題はそこではない  
むしろ会社や仕事に関係ない私生活の部分で大きな問題を抱えている

「今日はちょっと顔色さえないみたいだな」

オフィスに戻るといきなり声をかけられた

正直誰にも今は会いたくないのよつとも思いつつ話かけられたのだから返事をしない訳にもいかない

「そりかなー

そつちはお昼外で食べないの

「まあな、ちょっと急ぎがあるからコンビニで」

疲れた顔で私にコンビニの袋をかけた

テンション急降下中に声をかけている厄介者は、仲間で会社を立ち上げたからもちろん大学時代の友達

纖細な顔立ちからは想像できない男氣つぶりで社内で人気だつたりする

そんな事を知つてか知らずか結構とっかえひつかえ遊んでるみたいと噂なんだよね

まあ、そこら辺りは個人の自由だから詳しく述べに聞いたりなんかしなけど

でも、実は彼とは高校時代からだから一番信用できる仲

「手を動かしながら、私の話聞いてね」

うん、いいよと器用にパンを食べながら彼はこっちを向いた

「早瀬、この間言つてたけど日曜暇だつたよね」

確かに暇だけどと言いたそうに大きく頷いた

「じゃあ、私の野暮な用事に付き合つてくれるよね」

「暇だけど彼氏がいるだろ花には

その自慢の彼氏に付き合つてもらえれば話は早くないか

食事と仕事で忙しいみたいだけど間髪いれずに言葉が返つてくれる

「いるよ、今時点では  
でも解消しようと思つて日曜日に」

「またか・・・・・」

私の言葉にかなり驚いたのか咥えていたパンを思わずパソコンのキーボードに落していた



## 少しの思いとおもな心（後書き）

真面目に連載するのは初めてだつたり  
まあ、気楽に更新していくので  
よければ感想・アドバイス等を頂けたらなと思つていたりします

## ポタージュ（前書き）

一氣にこなします

## ポタージュ

お昼私が化粧室で皿にした携帯の中身は要するに世間一般に『浮気現場』という物だった

お節介な知り合いがわざわざ『真で報告してくれたのだ

彼氏の「ふらふらした優柔不断な態度は優しすぎる人と一応は解釈してたけど、

あからさまな浮気のシーンを見せつけられたら今までの気持ちが吹き飛んでいった

見た瞬間はそうだったんだよ、そうだったんだけど…

だけど、時間が経てば経つほど気持ちが落ちていく

「で、俺がまた花に協力しなきゃいけないのか」

彼が驚いてパンを落としたのはここに理由があった

普通は、いくら友達の別れだけじゃパンを落としたりはしない

私の多くない恋愛遍歴を辿っていくと過半数は相手の浮気で終わりをつげている恋が殆ど

そんな私は天に誓つても相手を裏切る浮気なんかしないんだからと思つていたりする

「たぶん彼氏には相手がいるし、やっぱ悔しいもん  
別に嫌がる事なんか一つもしてこなかつたのに」

元彼も、そのまた元彼もとたてつずいての最長記録を更新しているこの頃

もうこれは「魔のトライアングル」としか言い表せないだろう

「今日は部屋に荷物置いたから、そつちの回収も手伝ってね

「もつ相手と話しあつて機会もたなくていいのか

そつもつて聞いてくるナビ、もつ[写真みた時点で自信無くしたんだ  
もん

もう一向にも早く付き合つていた過去を消し去りたいって思いでい  
つぱ

午後の仕事が無かつたら今から飛んででも荷物を片づけたい

他にこんな事を頼れる男友達はいなくて結局いつもお世話になつて  
いまつ

「じゃあ、今度一杯おごつてもいいからな

「傷心につけこんでお金もあざらつとしてるの?」

「で、もし別れがゴタついて俺に被害が及んだ場合は上乗せ請求さ  
せて頂きます」

まだ、こんな冗談言えるから私大丈夫なのかな…?

## ポタージュ（後書き）

ご覧になつて下さり有難うございました

人は必ず揺れる（前書き）

これまたU.P

## 人は必ず揺れる

「ねほりはほり詳しく述べつもりはいけど、同棲してた訳？」

お昼ご飯が終わってぱらぱらと帰つてくる人が多くなつた中で  
ボツンと彼がつぶやいた  
人が多いわけじゃないから、そんなに気にしなくてもいいんだけど  
「どつ、同棲つていうか何て言つた微妙な感じなんだけど  
しいて言つたら半同棲的な感じかな」

出会つてかなり早くビビつときたから、これが最後の恋だと思って  
凄く力入れてたのに

「今日6時に、親父のバーで」

「は？」

少し意外な答えが返つてきた

「今回はいつもより傷痕深そうだし、聞いてやるよ  
親父は美味しいワイン探しとかでイタリアだから」

「いいよ、早瀬も色々あるだろ？」

そりや誰かにぶちまけたい気持ちはあるけど、そこまでお世話にな

るのは気が引ける

お言葉に乗りたい気持ちもあるけど

「その顔がな、けつこう話聞いてやらなきゃって思わずんだよ」

「別に泣いてないし、大丈夫だよ  
午後からも頑張るんだから」

「しつかりしろよ

もう少ししたら大口のクライアントの打ち合わせ」

プライベートを仕事に持ち込むて事は私が決めたルールでは一番  
してはいけない事

周りにも気を遣わせちゃうし、空気が悪くなつて他の人の仕事にも  
影響しちゃうから

そつ自分を責めるとまた一段と気持ちが落ちてきた

ああ、辛いけど午後に頑張らなきゃ

気分転換に自動販売機へと向かつた

人は必ず揺れる（後書き）

同じです

ワインせ心の薬（繪書き）

4話

## ワインは心の薬

「花も毎回懲りないよなー  
くじ運が悪いというか、何と表現したらいいのか」

「そんな事言わないでよ  
出会った時とか付き合いだした時とか、そういう兆候一切無かつたんだから」

かなりハイペースに飲み干す私のワイングラスにコポコポと新しいワインをつぐ

そう、結局早瀬のお父さんが経営しているバーへ来てしまったのだとお酒とおつまみがタダって言葉に妙に惹かれてしまって  
といふか、最後早瀬との仕事だったから半強制的に連れてこられちゃった

「もひ、ワイン注ぎ過ぎだよ」

「明日土曜だし大丈夫だろ」

また飲んだ先からコポコポとワイングラスに赤い液体が私に注がれる  
何だかお酒の力で心が軽くなつた気がしている  
早瀬に連れてきてもらつて良かつたかもしれない  
横にいる本人には照れくさくて言えないけど心の中で思わず呟いた

「でも、今分かつてよかつただろ」

少しの沈黙の後ワイングラスに満たされているワインをクルクル回しながら彼は言った

今までの雰囲気と打って違う感覺が私に伝わる

「人事だから言えるのよ

もう私なんかのキャリアになるとね」

少しの間軽い沈黙が続く

「それ俺は違うと思う

そりや、浮氣した相手が一方的に悪いけどさ」

「何よ」

「お互いで分かっただろ

他にお互いもつと合う相手がいることを」

お酒で思考能力が鈍つてるのかな

いつもなら即反論してゐるのに

「じゃあ、合う人って何よ

私は相手に合う様に十分向き合ってきたつもりなのよ」

「それは肩張りすぎ

お互い毎日そんな事してたら疲れるだろ」

妙に説得力のある話を口にチーズを運びながら聞いた

「で、そつちは彼女ビアしてんの?」

「別れた」

「ふーん、お互い様ね」

私は飲んでいたグラスを彼のグラスへカチンと当てた

「俺は浮氣されてじゃないんで」

「厭味つたらし」

「うじて金曜の夜が更けていく

## ワインは心の薬（後書き）

次もできるだけ早く更新します

## 私と朝日とストロベリー（前書き）

今日も更新します！

## 私と朝日とスロロベリー

「う、まぶしー」

朝日の光の眩しさに負けて、私は眼を覚ました  
自分の部屋じゃない天井、。

「えつと、ここの家じゃない  
つたー痛くて頭割れそう」

自分の部屋じゃない天井を見て思わずテンパつて起き上がつてしつ  
もつ、ここのは何処私は誰状態に加え一口酔いで頭が真っ白

「やつと起きたんだな  
朝飯出来るから食べろよ」

ひょいと早瀬が現われて來た  
とつこつ事は。。。。

「えつとー」

痛い頭を抱えつつ冷静に考へると、この部屋早瀬の家に似てゐるよ  
うな

お酒のせいで記憶が飛んじゃつてつるんだ私

「俺もひよつと飲ませ過あたつて反省したんだナビセ」

何か嫌な予感がする

慌てて衣服を確認すると、よかつた昨日と変わってない

まあ、お気に入りのスースが皺くじらになつてるのは自分に非があるからしちゃがない

「俺が信用できなかつた訳ですか？」

「いや、そんな事ないんだけど記憶が無いけど

昨日お酒のんでから一切記憶が無くなっちゃつて

セーフって事だらう

一安心したところで油断したのか頭痛がまた激しさを増した様な気がした

「薬と水持つてきてやるから」

「ありがとー」

うつ、早瀬が行つた後から吐き氣も来ている様なお酒弱いから次の日こいつなるの分かつてたのに、飲ませすぎた早瀬を恨んだ

ブー・ブー

音に気がつき何だろつと手を伸ばすと、コシツと携帯が手に当たつた  
ブラックだから私のじゃない

「ねー、携帯鳴つてるよ」

大きい声を出したら頭に響く

「誰か携帯開いて見て」

「分かつた」

多分女だろうね

少し遠慮しつつも私は彼の携帯を開いた

携帯の着信には意外や意外お母さんからであった

私と朝日とストロベリー（後書き）

有難いございました

\*

## 薬と地獄

「春子おばあちゃんから電話だよー  
こんな時間に電話なんて、薬はいいから出なよ  
「や

何だらうなと、早瀬が駆け寄ってきた

私が携帯を差し出すと不思議そうに彼は電話口に出る

会話が続いている中、もちろん一日酔い中の私にとっては地獄  
吐き気はくるは頭痛はあるはで、座つていられず思わず布団に入り  
こんでしまった

あー、早く電話終わらなきかな

早瀬の家を出てドラッグストアは駆け込めば解決するんだけど

今私は、その体力も気力もない

そう頭で考えてる内に電話は終わっていたみたいだった

「花ごめん、これから母さん迎えに行つてくる

今日旅行から帰つてきたんだと

俺全然知らなかつたんだけど、父さんイタリア行つてゐるし  
家まで送るあしがないんだよ

薬はコレおいておくから、水は自分でくんで

「えつ、ちょっと

早瀬はジャケットを羽織つてあれよあれよといつ間に飛び出でし  
まつた

問題はこれからだった

薬は飲めるわけだけど、とうぶんここから動けられないだろう

春子おばちゃんが、もし「」にやつて来ると少し大変な事になる  
といつか実家を巻きこんでの大きな騒動に発展してしまつ  
背中に冷たい汗が流れる

「これはダメだ」

薬を水で押し込んで私はゆっくり帰りじたくを始めた  
急激に動くとこれまた頭にくるので、動きが制限されたやつだよ  
ね、

鞆…鞆…私の鞆は「」にあるのかなー

早瀬に聞いた方が早いけど、やつは運転中だらう

刻々と時間は過ぎていく…

駅から近いから来るんだろうな春子おばちゃん

私はため息をつきながら、もう一度鞆探しを再開する「」にした

## 薬と地獄（後書き）

久々に更新再開しました  
まあ、気長に見てください

このための心浮気（虚書也）

\*

## 忘れものと浮氣

「鞄もあつたし、忘れ物も確認したし」

とにかく春子おばちゃんに遭遇しない様にと、それだけに集中していた  
危惧してる事もやうなんだけど、お母さんに簡抜けになつちやうからね…  
で、早瀬にお世話になつたとなると堪つたもんじやないの  
私は、急いで玄関へと向かつた

「痛いし、パンプスは履けないし最悪」

急いでいる時こそ焦りで物事が進まなかつたりする  
普段なら、すつと履けるパンプスまでもクラッチの所で手こする  
ぶつちがつて走りたいて気持ちもあるけど、結構高かつたし

（ ）

そんなイライラしている時に携帯が鳴る

早瀬か友達からかと思つて携帯をポケットから出し田を向けると

「げ、恭介からだ」

まあ、今時点は彼氏からの電話

こつちは諦めて別れた気満々だつたけど話明口だつたんだ  
出たくない、あー出たくない

お前は暇なのかもしれないけど、私今忙しいの！

無視を決め込んで再度パンプスに挑戦

でも、中々着信が切れる気配がない

明日の事もあるし、しじみがない出てやるかと携帯の通話ボタンを押した

「もしもし、何ですか」

「あのさ、何で昨日帰つてこなかつたの  
電話も出ないことを」

恭介の口調はやや強みがかつていた  
でも、今の私にはそんなものは正直おかまいなし  
あと片方のパンプスのクラッチを止めなきやいけないんだし

「帰つてこなかつたつて、そつちは出張だつたんでしょ」

「電話繋がつたと思えば、勝手に切られるし」

あー、早瀬が無理やりピチピチ切つてたんだ  
どうつで着信のお知らせもないし

「あー、ちよつと抜け出せなかつたから  
ちよつど仕事の山だつたし」

「今、会社にいるの？」

「いたらさ迎えに行つと思つて」

「へ、今日はいいよ家帰つてるし」

「そつか、ならこいんだけどさ」

電話を終えた後少し放心状態になってしまった  
もちろん、この恋は昨日終止符を打つたつもり  
全然恭介は、私の事もう興味ないとthoughtたのに

何だかこの件面倒になる様な香りが、ふうんと漂ってきた様な

## 忘れものと浮氣（後書き）

今回も更新しました！  
見て下つている方はいるかな（、；、；、）  
と内心不安ですが、、、

「おーい、寝てなくて大丈夫なのか」

はつと顔を上げると早瀬の姿がそこにあった  
と、いうことは…

「はーい、花ちゃんお久しぶりね  
お土産を今日届けようと思つてたから  
まだ居てくれてよかつたわー」

もはやゲームオーバー

やつぱり危惧していた通り、早瀬の後には春子おばちゃんが満面の  
笑みで顔を覗かせていた

別に春子おばちゃんが嫌いな訳じやないけど、  
帰りたい・・帰りたい・・帰りたい・・と頭の中で言葉が舞う

「ね、久し振りに花ちゃんに会つから嬉しくなつて  
お兄ちゃんにね、無理やりケーキ屋さんに寄つてもうつて紅茶と  
ケーキ買つてきたのよ  
ここ寒いしリビングでお茶しましょ」

春子おばちゃんはお土産類を全部早瀬に持たせて、一人上機嫌にリ  
ビングへ向かつていつて  
相変わらず強引で元気な様子

「一日酔いの所ごめんな  
花が居るつて言つたら、一人盛り上がりちゃつて

つて、そんな睨むなよ」

「ここに残るってこののがお姉さん」「バレたら困るのよ」

「まあまあ、これで貸し借りなしつて事で」

ちょっと待つてと言つ間もなく、荷物が重すぎると彼もまた行つてしまつた

ハシカベタ田せりこじない本業

「花ちゃん、紅茶冷めちゃうから早く来てちょうだい」

「はーい、今行きます」

しかたない会つたからには覚悟を決めなくちゃ

「花ちゃんが好きなケーキ屋さんで買ったのよ遠くてそれで、ここに来るのが遅くなっちゃたんだけど私は余り物でいいから一人とも好きな物とりなさい」

嬉しそうな春子ちゃんを見ると罪悪感まで感じてしまつ私  
わからまで、おばちゃん避けようとしてたんだけど  
うめで喜んでくれるんだつたらねー

「おばちゃんが先にどうぞ、私こそ余り物で大丈夫だから」

いいのよーつといいながら、早瀬の家でいつもしてくれていてる様にお皿にモンブランを分けてくれた

「うふふ、うふふふ

じーっと、私と早瀬を交互に見る春子おばちゃん

「おばちゃん、あのね

「いいのよ言わなくて、私には分かるものー  
やつとお兄ちゃんも落ち着いてくれるのかなって思つと嬉しくて」

あー、やつぱり来てしまつた  
何でこう人生ついてないんだろう

## あやめなみや（後書き）

長い間期間を空けての更新がやっと出来ました  
私は書きながらストーリーを作る派なので、すりゃりと書く日もあります  
出来ない日もあり、  
時間をかけた割には… です

先日は感想を有難うございました  
書くひとつひとつ気力がまた戻つてきました

## 午後の「まかし

「家にいつも帰つてくる時違つ香りただよわせてたから  
それはやつぱり男性としては、最悪でしょ  
顔だけは確かによく生んであげたんだけどねー」

「そう言つておばさんは、紅茶をすすつた

確かに、春子おばちゃんの「お通りよ  
面倒見がよくて友達思いなのは確かだけ」

顔から見て纖細と思つたら大間違い、大雑把中の大雑把  
仕事でもプライベートでも細々した所は殆ど押しつけてくるし  
とにかく顔に似合わずの私の人生の中での性悪男ナンバーワンのお  
墨付きを贈呈できるくら」

で、早瀬に視線を向けると早々に席をはずしやがつて「いつ  
大体早瀬の仕事の内容は把握しているから、急ぎの仕事はないはず  
なのに

まるで関係ないかの様に真面目そうにパソコンの前に座りやがつて  
完璧に逃げやがつた

「そうそう、今日パパがイタリアへ仲間とワインの買い付けいつち  
やつたから寂しかつたりするのよ」

「彩香ちゃん、お泊りとかで家いないの？」

早瀬の家は彼と妹の彩香ちゃんと二人兄弟  
確かに彩香ちゃんは私よりもつ下で可愛いの

顔は早瀬家に生まれたからには芸能人ばかりは当たり前なんだけど、どこかの誰かさんと比べて性格もいいからねー弟しかいない私にとって本当の妹みたいな存在だったりする

「やつぱり一人だけだったら、夕飯も作りがいが無いじゃないそれに彩香が花ちゃんに会いたいって最近煩いし遠慮しなくてもいいのよー」

「はあ」

毎回だけど、この春子おばちゃんの押しには私弱いんだよね

「それに、パパが家用に卸してくれる美味しいワインもあるし未成年組もいなくなつた事でみんなでお酒飲みましょう亮と二人でいらっしゃい」

「本当に春子おばちゃん疲れてないの?」

「少々国内旅行行つてきた所で、パパと一緒に行つたヨーロッパ一周とは比べ物にならないわ」

ねーいいでしょ、ヒ勢いで言われたらもうYESSと返事するしかない

「と決まつたら、まあこんな時間

久しぶりにお兄ちゃんも花ちゃんも来てくれるんなら  
張り切つて腕によりをかけてお料理しなくちゃ」

昨日の今日でまたお酒とは、胃が重たい  
一向に早瀬は助け舟も出してくれないし  
ああ、またややこしくなつてしまつた

恭介の事もあるところのこ、この週末思わずやるよ

## 午後の「まかし」（後書き）

更新の手違いで消えてしまつて、ショックと憤りながらやつと書き終える事ができました

## 眠りからの魔法

帰りの挨拶も簡単に済ませ、春子おばちゃんは直毛くと帰つていった

「はやせー、ちよつと巻きこまなこでよ」

確かに久しぶりに、彩華ちゃんには会いたい気はしなくもなけど春子おばちゃんは、名前同様に一年中春みたいな人だから変な勘違いされちゃったのは、確實

「母さんが勝手にした事だから、俺も被害者俺だつて散々花に巻き込まれてますが

あー言えば、いー言つてくる口の減らない奴最後には見合いが当分断われるとか、喜ぶなんて

「いの話春子おばちゃんの所で止まると想ひつゝ、  
私のお母さんの所へ話しあはなしありません

「やうだらうね

「あのね、私は恭介の事だつてまだ残つてゐるわけ  
これ以上複雑な事は抱えたくないの」

「だらうね

さつきから聞いていれば、分かつてゐるのか分かつてないのか朝起きて一日酔いだつた私は最悪な気分が最骨頂に達していた

「いいの、もう逃げられなくなつたやつのはへ」

「俺は逃げようとか考えてないけど」

「もう話す気がつせた

今度こそ帰るから、時間になつたら向かえにきて」

早瀬は、いつたい何を考えているのか私には一切分からない  
話しをすると頭がまた疼いてくる

今日の事は行きたくないけど、約束をしたからにはスッポカスのも  
無理で  
とこうかスッポカス勇気がなくて

「車で送りうか」

「いいです、」あこへ電車で帰りますから」

鞄を手にとつ、もう冷め切つた紅茶を一気飲みして私は早瀬の家を  
出た

春子おばちゃんこ、かなりの量の紅茶を勧められて飲んだからお腹  
は水樽の様

今にも、ぱちゅぱちゅといつている



あまり自信はありませんが……

## 残り想い心の中

「ちよつと、知らなこつに時間が経つかけた」

気づけば5時

早瀬の家から帰ってきた途端、やつぱつ薬だけじゃ体が持たなかつたみたいで

倒れる様にベットに倒れこんで寝ていたみたい

早瀬家の夕ご飯は大体6時半くらいだから、そろそろ迎えにくる頃だ

その前にシャワー浴びないと

着替えを手に持った瞬間、玄関のチャイムが鳴つた

「早瀬いくり暇でも、ちよつと早すぎでしょ」

そう言ひて早瀬だと想い私はドアに手をかけた

「早瀬つて誰なんだよ」

しかし、やこじこるのは早瀬ではなく望んでいない訪問者だった

「き ょ う す け」

来ると想つていなかつたので、私の頭の中は真っ白

「来るなら、連絡してくれればいいのこ」

「連絡したさ、何回も  
携帯確認してみれば分かるだろ」

電話と同じく恭介は少しごころか、かなり強張っていた

「寒いしさ、とろあえず中に入れて」

「えつ」

このまま恭介を部屋に通すと、今までの決意が曖昧に流される様な  
気がした  
もう私は恭介に思はず、思はずなんだけど  
彼を見つめていると今までの思いが走馬灯の様に込みあげてきて微  
妙な感情が湧いてくる

「ほり、花入らせりよ」

「急な用事じやなかつたの、用件は何」

「用件とか、俺を入れてくれないわけかよ」

この時一瞬だけど、今まで見たことのない恭介が私の前にいた

「だから用件はつて聞いてるでしょ」

「入れるつてんだろ」

目の前に居る人は完璧に、私の知つている恭介ではない  
今まで、こんな大きな声で怒鳴るなんて1回もなかった  
大らかがトレードマークな人だったのに、そう思うと膝ががくがく

震えてくる

「最近、俺の所に帰つてこないし  
俺が携帯かけてやつても通じないし、舐めてるわけ？」

もう怖くてしかたない

チエーンをとかなければ良かつたんだけど、早瀬と思つたばっかりに  
恭介が思いつきドアを引けば、  
全部思いとおりになつてしまつ

助けて早瀬

こつこつ所に来てくれないと、約束したんだから

## お口様のない日

「サレバアリヤジヤねーよ」

現実はそんな甘くなく、私は結局力負けで恭介を家に入れてしまった。

恭介の意外な一面と、じつなるはずでは無かったという事で頭が真っ白

私はきちんと彼に真正面から向き合つて恋愛してきたつもりだったけど私が見てきた恭介は、あくまで彼の『外面の一部』にすぎなかつたという事なのだろう

目の前にいる男は理解していた、人が良くて優柔不斷な人間じゃない

「でさ、何で昨日電話でなかつた訳?」

「電話の事は話したでしょ」

そう答えると、恭介はむつとした様だった

独特の緊迫した空気が部屋に流れる

このまま恭介の思うがままには絶対になりたくない  
あまり奥にはいかさない様にと私は小さな抵抗を試みた

浮気をした恭介が私を責める真意がいまいち掴めないでいる

恭介自身が「浮気」をして私を裏切つたじやない  
これが属にいつ独立欲つてものなんだらうか

「下の名前を呼んでる男の声が聞こえた

お前のところは冗談なんかいないだろ」「

早瀬のやつ、助けに来る所かややこしくさせたるじやん  
意外な所でトラブルは起つていたみたい

「痛い、痛いから恭介」

私が、はつきりと答える事が出来なかつた事に腹を立てたのだろつ  
恭介は私の腕をきつく持ち壁に強く押し付けた  
腕をつかむ手は、どんどん痛みが強くなる

「お前が、疑わしい事してるからだろ  
答えられないって事は肯定してるんだ」

「別に、肯定してる訳じゃないでしょ」

出口が見えないお互いの会話

力チカチと時計は早瀬家で行われる食事会が迫つていると刻んでいく

「私は予定があるの

恭介には悪いけど、明日きちんと話合おうよ

私も丁度、恭介に話したい事があつたから」

もつ、らちがあかないと思い私は恭介を思つくり睨んだ  
煮え切らない変な気持が、もやもやと行つたり来たり

「俺は今日聞きたいわけ  
疑わしいって思つて、お前の言つ通りなればさ  
今でもかまわないだろ」

「もう、いいかげんにしてよ」

とにかく一緒に空間にいたくなくて、私は恭介の腕をありつたけの力で振り払い

私の家なはずなのに飛び出してしまった

お口様のなご用（後書き）

HPするのが遅くなりました。  
感想ありがとうございます  
こんな駄文に評価をして頂いて嬉しいかぎりです

## 火と油のその先に

「あー、自分の家なはずなのに出てきちゃった」

衝動的な行動を起こした事を反省しつつ、  
家から出た後トボトボと一直線に伸びている廊下を下向きがざんに  
歩く

恭介が危険人物となつた今、部屋に一人残すのは嫌なんだけど  
でも恭介しか居ない部屋に帰ると、間違えなく前以上になる事に違  
いないだろう

お金をとられたら？

色々ある重要な書類を見られたら？

キッチンにある早瀬との写真を見られたら、絶対に何か起ころう

どうして早瀬との写真をキッチンに飾つているかというと  
春子おばちゃんの趣味で写真楯を作つたらしく、早瀬と私の2ショ  
ットの写真つきでマンションに送つてきたから  
飾らないでいるのも、春子おばちゃんに悪いし

早瀬との写真を差し替えればよかつたんだけど、面倒で結局そのま  
まに

恭介は私の家に來てもキッチンには入らないから、こつそり移動さ  
せていた

戾らない訳にはいかない

恭介の事だつて、いくら恭介が猫被つていたとしても

私は大人なんだし、自己責任

戾らなきやいけないんだ、帰らなきや自分の家に

「おい、花その格好は・・・」

振り返ると、やつきまで来てと望んでいた早瀬の姿があつた  
眠たかつたから、ブラウスにジャージ  
寒いだろといいながら、自分が着ていたパーカーを私にかけてくれ  
両肩を掴まれた  
やつぱ、こういう所は優しかつたりするんだ早瀬は

「彼氏が来てる

ちょっと、今回も男運悪かつたみたいでね  
自分の家なのに飛び出しちゃった

「優しくて優柔不断がとりえとか言つてたんじや」

早瀬の大きな目が更に大きくなつた事を感じた  
そうよ、私だつて恭介がそんな性格だつて今まで知らなかつたんだし  
早瀬が爆弾を落としたにもかかわらず、遅すぎなのよ

「そういう時は、女一人じゃ対処できないだろ  
約束したんだし俺呼べよ」

「呼べるわけないでしょ

乱暴に部屋に入つてくるやいなや、壁に押し付けられて  
腕思いつきり掴まれて、動けなかつたんだから

ほりと腕を早瀬に見せると、少し青痣が出来ていた

「で、男はまだ花の家に居る訳か」

「うん、でも、 、 、 」

恭介の様子だつたら、かなり興奮していた  
だから、もしかしたら早瀬に何か起ころるかもしない

「乗つかかつた船だし

それに早く片付けて行かないとい、時間ないし」

「ちょ、ちょっと待つて

私の制止も聞かず、早瀬は私の部屋へと向かつていった

## 火と油のやの先に（後書き）

今日はできるといひ今までひかするつもつです

## もも色やじるべ

「どうも、はじめまして」

私を挟んで、早瀬と恭介の妙な空気が流れる  
どうにか穏便に話が進めがいいんだけど、内心私はひやひやしていた

「君か、やつと出てきた

噂には聞いてたけど、やっぱ後ろに男がいたんだな」

「後ろに男なんて、私はそんな事」

恭介は薄々早瀬の事を知っていたみたいだった  
後ろに男と言われるなんて、驚いてしまう  
でも、私は神様に誓つて早瀬と関係持つた事はない

「お前を紹介してもらつた時に言られてたんだよ  
後ろに男がいるから、俺が勝つか負けるかつて」

「え」

恭介の言つている意味が、いまいち分からなかつた  
どうして、そこで早瀬の話が出てくるのか

「すごいよなお前

「二人を手玉にとつて俺を笑つてたんだる」

少なくとも私は恭介に一生懸命だつたんだよ

手玉にとるとかって、恋愛つてそんな物じやにのに  
私はそんな器用な人間じやないのに

恭介から出てくる一言一言が、今までの私を否定してる様で悲しくて耳を塞ぎたくなつた

ぼたぼたと涙が床に跡をつける

私は、恭介と別れることが寂しくてとかじやない

少なくとも一時期本氣で愛した人だと思うと悲しくてしかたなかつた

「花は風呂入れ」

今まで傍観していた早瀬が、空氣を打ち消す様に口を開いた  
やっぱ人の事つて思つてるからだろう、一人だけスタンスの違う彼  
を見て拍子ぬけしてしまう

重い空氣にも負けないマイペースぶりは「」健在つてといふ

「へ？」

「」のまま話してもお互い出口見えない様だし

簡単に言えば、二人ともに壊れた関係を戻す意思も見えないんだ  
る」

恭介は、どう思つているんだろ  
気持ちはやっぱり浮氣相手にいつてるのかな  
それとも、ヽヽヽ  
もう終わつたのに、終わつた事なのに

もし、普通に明日恭介と話せていたら  
こんな事恭介から聞かなくてよかつたのかな



## おもじやじるべこ（後書き）

お久しぶりです

最近身の回りが忙しくて日々更新できませんでした…

## シャボン玉

あれから無理やりバスルームに押し込まれて、気がつけば恭介の姿はもう部屋には無かつた

「恭介…、帰つたんだ」

部屋の空気が、がらつと変わる  
これで全てが終わったと思うと、最後は苦味の効いた別れ方だった  
けど寂しく感じた

落ちついたからかな、今なら冷静に考えて恭介に腹が立ってきた  
私は、あんたみたいに道徳に反して浮氣なんかしてない  
それなのに、最終的に私が悪女みたいな扱い方されて終わるなんて

「むかつく

勢いにまかせて近くにあつたミニラルウォーターを口にした

「花さ、俺のせいだごめんな

別に早瀬が謝る事じやないのに  
私とは目も合わせ様とはしない早瀬

「俺さ、出過ぎたマネし過ぎた  
ちょっとした知り合いの知り合いでつたから  
花には知らないふりして」

正直その言葉にはビックリした。

「いう事は紹介する以前から面識はないにしても早瀬は恭介のこと知つてたんだ

「それは、早瀬の優しさだったんですよ」

さーつと、夕方の香りのする風が窓から吹き抜ける  
もう、今は冷静なれるから

「まあ、人は噂にはよらにとか思つてたんだけど」

さつさまで、普通に話せたのに今の私と早瀬には重い沈黙が流れる  
「知つてて見守つてくれたんでしょ  
まあ、今どういって言つてもね」

「花、、、、」

「ずっと浮気つて相手が悪いって思つてた  
でも、違うかなーって今回の事で感じてきちゃつてシャワー浴び  
て確信して

私は、自分で物を押しつけてしまつてただけかも知れない  
今まで恭介が押さえてくれたのも奇跡で」

誰よりも幼くて、誰よりも世間を知らなかつた私が全部招いた事  
「安い女」に、今私になつてゐるのかなーって思つ  
もちろん口にはプライドが邪魔して言えないけど  
もつと早く気がつけばよかつたのかな

「時間でしょ、すぐ準備するから待つて」

もともと竹を割った様なさっぱりした性格ではない私は、揺れる力  
一テンの裾を掴んだ

## シャボン玉（後書き）

ずいぶん時間が空いてしまいましたが…  
結末も見えてきた事ですし、どんどん更新していきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4766f/>

---

ゆらぎこころ

2010年10月10日21時16分発行